

訪 中 旅 行 記

長 広 敏 雄

一

測らずも中華人民共和国を訪れることができた。期間は短かったが、十八年振りにみた中国はなつかしかったし、また解放後の新建設は驚嘆に値した。一行は東大東洋文化研究所の米沢嘉圃教授を団長とする六名で、中国美術史研究日本学術代表团という一団である。日本中国文化交流協会が斡旋して、中国人民対外文化協会が招待したものである。

私たちの旅行のコースはまず、広州にゆき、広州から飛行機で北京にとび、北京から飛行機で西安にとんだ。その間に、北京で一九六三年の一月元旦を迎えた。西安からは汽車旅行で南京へ、南京から蘇州へ、蘇州から上海へいった。上海からは飛行機で広州へとび、それで全日程を終え、境界線の深圳までわざわざ見送られた北京の中央美術学院研究所々長朱丹さん、広東の国画家関山月さん、通訳

の楊為夫さんに再見の握手を交わして香港経由で帰国した。

視察の大部分はそれら大都市の諸博物館を中心として見ることであった。すなわち北京では歴史博物館、故宮博物院、西安では陝西省博物院、半坡博物館、南京では南京博物院、上海では上海博物館、広州では広州博物館、広東省博物館、広州美術館である。訪ねたい博物館はそのほかにも少くなかったが、日程がその訪問をゆるさなかった。私たちが中国美術の研究者であるために、各地で中国美術家協会的美術家、美術評論家が接待してくれ、当然のこととして、現代中国の美術及び工芸活動も視察の対象となった。そのわけは、現代の中国にとって過去の美術作品と美術伝統は、いまの創造活動と不可分なものとされている。美術史家は同時に現代作品の創造にとっても積極的に参加すべきものとされている。その意味から、私たちは日程の一半を美術家及び美術工芸家との接触到に費やした。北京、西安、南京、広州では美術家協会の会員たちとの懇談会をもつ

たし、北京、上海、広州では美術工芸の製造所を見学した。これらの見学は、それはそれとして、たいへん興味深かった。それについては大阪朝日新聞（二九六三、二、一三朝刊）に短文をのせたので、ここでは省略したい。

二



北京中央美術学院訪問

今度はじめて中国大陸をかなり広い範囲にわたり、飛行機上から眺めることができた。これは得難い貴重な体験となった。まず第一は広州から北へほぼ真直ぐに北京までの空路である。午前七時二十分に広州空港を出発し、九時一〇分に長沙空港到着。一〇時四五分武漢到着。一三時二分鄭州到着。一六時〇二分北京到着であった。それぞれの空港に三十分の少憩、午食のために武漢には一時間休憩した。私は華南、華中にはじめての旅だったので、特に興味ふかった。高度二七〇〇メートルで広東省を北上したときは、曇り空で雲海上をとんでいた。その雲海を突き抜けて、犀の角のようにとがった峰が遠く東の方にみえた。九連山脈の巨峰かも知れなかった。湖南省に近くなつて、群峯と雲霧との係り合いは、まさに南宗画そっくりである。墨のにじみという墨法はまさにこの風景にぴったりした表現法である。

湖南省長沙の近傍では、やたらに小沼沢が散在していた。それがガラスの破片をばらまいたようにキラキラ光っていた。長沙周辺の丘陵も野も地面が赤かった。湘江の水は美しくみえ、帆船が点在していた。洞庭湖は大きすぎて、ただ遠くに靄ってみえた。

武漢に近付くと一層ひろい水面をみた。洪水ではないかと思わせるほど、形をなさない水面がひろがっており、ところどころ幾筋かの道路が陸から青い水底へともぐっていた。厳寒の季節でもこれだ

から雨季には一層大規模な湖沼にひろがるわけである。

いまでも忘れないが、武漢空港につくと、空気がぐっとつめたくなり、空が碧く澄んでいた。南シナに別れて北シナに近付いたことが直観された。湖南省北部から河南省境にかかると、飛行機の高度は一八〇〇メートルで、もう嶺南のような巨峰はなく、ただ金屬的にこわばった山岳が多くの谷をつくっていた。樹林はだんだん減ってゆき、北宗派の山水画にかわりだした。唐代の青緑山水画である。飛行機は京漢鐵路に平行して北上したらしい。河南省の大平原は冬枯れの野で、いわば、途方もなくただ広いベニヤ板のようであった。味もそっけない灰色の平板である。葉が落ちて緑がない季節だから、樹々の存在さえ、空からは確かめられぬ。古代的な「天下」がいま目の下にひろがっている。歴代の帝王たちが勝手気儘にこの広いベニヤ板の上に自分たちの権力を振っていたことが、想い起された。大地の景観なんの個性も特色もない河南大平原は、黄河を北に越えてからも、一層灰色の姿で打ち続く。河北の大原野である。無味乾燥で単調きわまりない。北京はそういう景観のなかに存在するのである。

北京から西安への空の旅もい勉強になった。具体的にいうと、北京空港を午前八時四十五分出発、高度二七〇〇メートルで河北省曲陽上空を通過し、太行山脈をこえて、山西省太原に一〇時三〇分

到着。三〇分少憩ののち、汾水流域を南下した。高い山には雪が斑らに附着し、地上の河は銀色に氷結している。すべて枯渴しているのである。窓外の西方に呂梁山脈が馬の脊のようにながながと伸びていた。やがてその向うから細いうねうねとした河流がみえはじめたが、それは黄河が陝西省と山西省とを限る姿なのだった。それが山と山との間隙を縫って南下し、最後の山陝にせまる。手持ちの三百万分の一の地図でみると禹門口、龍門山、龍門にあたる。禹門口の南で、ちやうど猛禽の踏みたてる趾のように、河流はさっとひろくなる。龍門という地名はまったく巧く表現したものだ。その広くなった黄色っぽい河原（濁水期だからだろうか）のまんなかを青々とした黄河が悠然と分流しながら、そして山西省側の滄河と合流しながら流れすすむのであった。

私の観察は印象的だから、地理学的に正確でないかも知れないが、このあたりで黄河が大きくなるように思われた。あいにく、飛行機はそのあと陝西省の平原に突入するので、黄河が渭水を合して、急に東流する地帯のことは、よく分らなかつた。しかし、禹門口、龍門の豁然とひらける景観の胸のすくような痛快さは、つよく私の目をとらえた。

もう一つ、陝西省に入ると大地の眺めは一変した。東西に深くひろがる大平原に入ると、山脈は遠退き、その大地は深く緑色を塗っ

たようであった。それは河北、河南平原のベニヤ板の大地とまったく異なる。涇水の水は清く流れていた。きわめて大規模にまとまったうるおった大平原。その主要点に静まる西安に到着したのは午後一時三分であった。

第三の飛行機の旅は上海から杭州、杭州から長沙、長沙から広州という空路をとった。杭州から長沙へと西へ向う途中、江西省北部の鄱陽湖を横切りながら、この巨大な湖が単なる洪水の痕のように、取り止めのない姿で霞んでいたことを記憶している。いったい、中国の巨大な湖は年ごとに形を変えるのではないだろうか、とさえ思われた。湖岸という一定した境がつかめないからである。

### 三

さて私は中国諸地の博物館について述べねばならない。一言でいうならば、中国では博物館事業はきわめて注目すべき業績をあげていることである。解放後わずか十五年の短い歳月に、よくもこれほど整頓したと思う。その代表はなんといっても北京の歴史博物館である。これは建国十周年記念として一九五九年に竣功した。それは天安門前広場の東側に位置していて、西側の人民大会堂と対置されている。史前時代から一八四〇年のアヘン戦争時代までの中国の遺品を列陳するが、解放後発掘され発見されたもののみ八千点を収蔵

している。陳列の方法は、中国独自の時代区分により、原始、奴隸、封建の順序によっている。なによりも中国史を教育することが目的である。美術作品を芸術的立場から様式的に分類し配列することは、この博物館の任務としていない。この博物館は新出遺品のほかに模写図、模型、文献をならべており、壁には説明文や説明図を貼りつけて、大衆の理解に資している。模型の例をあげると近年の大発見に属する河南省信陽の戦国大墓出土の一メートルにおよぶ漆製木造鎮墓瘞瘞。山東省沂南の画像石墓室。また山西省応県の木造五重大塔も目をひいた。説明図は時に応じてセピア色や緑色で描かれており、陳列品とのおだやかな調和をしめしていた。また全国各地から出土品が集められていることも、歴史博物館の大きな特色である。ただし、出土地の博物館を圧迫しないように、ときには原品を出土地に於て陳列し、類品または模造品を歴史博物館にもたらすようにもしている。たとえば、戦国墓発見で、中国の最古の絹画「婦人図」は長沙に原品を陳列し、北京には模写図を出している。

歴史博物館は二階建てである。一階は史前から漢代までの陳列、二階は六朝から明清に至る陳列である。ひろびろとして明るく、陳列ケースも落着いている。ただ画卷や書籍類がガラス・ケース内に水平に置いてあつたので、写真撮影のできないことがしばしばであった。個々の作品については、紙幅の余裕があれば、のちに述べ

ることにした。

北京には古くから故宮博物院がある。清代の紫禁城の名残りである。ただ戦前は南正面の午門楼上だけに博物館があつた。その他の建築は周囲を見てまわれるだけであつた。いまの故宮博物院はまったく一新され、芸術作品鑑賞を目的とする美術館となっている。つまり歴史博物館では中国の歴史を理解させる目的で陳列されているのと対照的である。太和殿・保和殿を中心とする一劃が歴代芸術館と名付けられていて、史前時代から殷周、秦漢、六朝、唐宋、元明清の順で陳列される。歴史博物館の陳列品とどこが違うかといつて、特に差異はない。歴史博物館の遺品の方が、より最新の発見品が多いように印象されたが、しかし故宮博物院歴史芸術館にも新発見品が少くない。この歴代芸術館のほかに故宮の東北角には、彫塑館（もとの奉先殿） 絵画館（寧寿宮、皇極殿の側廊）、陶瓷館（永和宮、承乾宮）、青銅器館（景仁宮誠肅殿）、珍宝館（頤和軒、樂寿堂）などがあつて、それぞれ故宮内の宮殿をそのまま利用している。絵画館は延々とつづく長廊に螢光燈を入れたガラス・ケースをならべ、実に多量の絵画、特に多数の明清画が陳列されていた。彫塑館では漢代の土偶、六朝の土偶、石仏、宋元の木彫、浮彫埴、明清の小彫像があつたほかに龍門賓陽北洞の菩薩立像など石膏原寸模造像が数個陳列されていた。しかもっとも私の目をひいたのは、河北省曲

陽出土の多量の石仏であつた。これは『考古通訊』（一九五五第三期）で曾て報道されたものであり、かねてから見たいと思つていた。北朝、隋唐の作品であり、発掘当時は一一三九像があつたといふ。青銅器館は伝世品をあつめていたが、余り注目すべきものはない。陶磁館も特に逸品というほどのものはなかつた。珍宝館に収蔵された清朝宮廷の珍宝は興味ふかつた。これらは巴里ルーヴル宮の宮廷用工芸を想起させた。そして、故宮博物院といふのは、東洋のルーヴル博物館として名実ともに尊重すべきものと思われた。毎年國慶節の頃には二週間にわたり故宮秘蔵の書画を特別陳列するという。ただ私達は特別の測らいによって、次の諸名画を鑑賞することができた。

- |   |       |        |
|---|-------|--------|
| 1 | 伝顧愷之筆 | 洛神賦図   |
| 2 | 隋展子虔筆 | 游春図卷   |
| 3 | 宋李唐筆  | 採薇図卷   |
| 4 | 宋趙伯駒筆 | 江山秋色図卷 |
| 5 | 元錢選筆  | 山居図卷   |
| 6 | 元趙孟頫筆 | 秋郊飲馬図卷 |
| 7 | 元黄公望筆 | 九峯雪霽図軸 |
| 8 | 元王蒙筆  | 夏日山居図軸 |
| 9 | 元呉鎮筆  | 墨竹坡石図軸 |

この十図のうちで隋展子虔筆游春図巻がもっとも感銘ぶかかったことを記しておく。

故宮博物院はいわば古代美術研究所ともいうべき組織をもっていて十数名の研究員を擁している。それに助手がいる。その部門は青銅器、文字(書)、彫刻、絵画、刺繍、陶磁、宮廷建築、庭園に分かれている。別に技術員がいて、青銅器、絵画、彫漆、漆器、木器の技術を分担している。

ある日、私たちは故宮博物院内の一室に招かれ、北京各界の人士と中国の文物保護について懇談会をもつことができた。その懇談の内容は、すでにしばしば『文物』や『考古』のなかで発表された内容とあまり変らないから、ここでは省略したい。

#### 四

永年の宿望であった西安訪問が、今回実現出来た。西安には唐代の太廟の遺址に孔子廟があり、この廟の建築がいまは陝西省博物院に利用されている。奥室は有名な碑林である。この博物館の陳列も歴史的配置法を採用し、夏時代から阿片戦争までを包含する。しかし陝西省の地方的特色として周秦漢唐の遺品が中心となる。これに付属して青銅器館、陶磁器館、書法館の専門的陳列館がある。こう

いう陳列計画はやや北京の故宮博物院の計画に似ている。更に最近の大発掘である唐の永泰公主墓出土品が特別室に陳列されている。永泰公主墓の発掘報告はまだ正式に発表されていないが、一九五八



西安陝西省博物館（もとの文廟）

年に発掘され、一九六一年にニュースとして発表された。永泰公主は則天武后の孫、大足元年十七歳で死亡、中宗の神龍二年にその屍体は乾陵に陪葬された。発見品中でもっとも注目されるのは墓室壁画であるが、これは唐代墳墓壁画中でもっとも優秀な作品といわれる。まだ壁画は墓室内に保存されているので、原物をみることはできなかつた。陳列室には三点の模写画が展示されていたが、その模写画よりも「人民中国」（一九六三年正月号）に発表された原色及び単色図版の人物画複製によって、この作品の秀れていることが分つた。なお、その陳列室には永泰公主墓石槨の線刻画（人物図）十石の拓本が展示されていた。これまた唐代線刻画中で貴重な位置をしめるものである。副葬の陶器土偶は略三百点がならべてあり、なかにみごとに大型馬俑が一際目立っていた。残念ながら報告未発表のため、この陳列品の撮影はゆるされなかつた。この博物館では唐代の土偶と三彩陶器が特にみごとであつたが、これらについては後に述べることにしたい。なお、目下建設中の彫刻館にはすでに六朝、隋唐の大石彫類が搬入されつゝあつた。

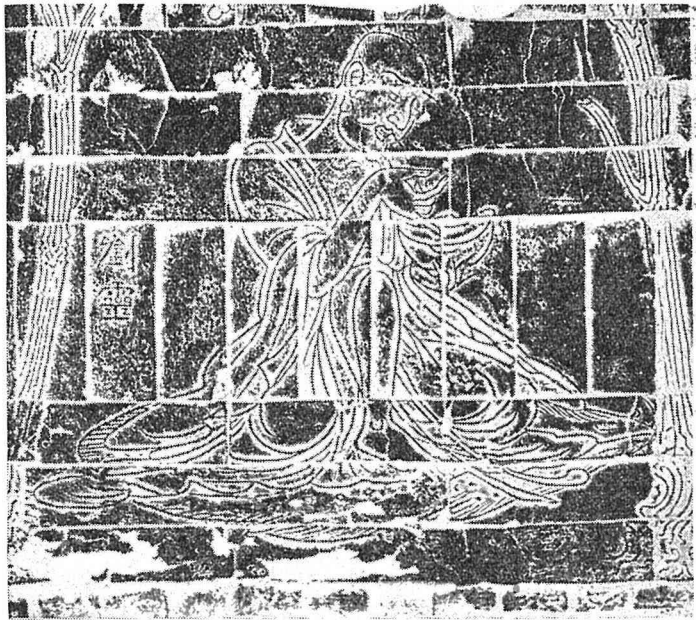
中国では有名な遺跡地を発掘後そのままの姿で保存し、その遺跡地を博物館にしている。西安東郊の半坡博物館はその代表的なものである。半坡村は渭河の近くにあり、平地よりはやや小高い丘陵地である。遺跡の上には鉄骨の屋根がおおい、その前の低地に煉瓦建

の陳列館がある。史前時代の発掘品をしめしながら、きわめて細密な説明をほどこしている。

西安の滞在はわずか三日間であつた。これを訪ねるべき多数の遺蹟に對してあまりにもあつげなくすぎた短時日であつた。しかし曾て訪問した洛陽に比して西安原野はより雄大であり、しかも大らかで温かみを感じられた。それは大洋の波のうねりのような原野のゆるやかな起伏のなかに懷かれているからかも知れない。奈良の大和平野を我々一行はひとしく回想したのであつた。もちろん、大和平野を大規模に拡大しての上である。

## 五

中国を南へゆくほど我々は心がなごんだ。南京、蘇州は正月とは思えないほど、日射しが明るかつた。紙面がないので、ここでは博物館のことだけを報告しておくにとどめる。南京博物院は中山門の内側、明の故宮址の一部に新築されたものである。ここもまた陳列品が歴史的配列によつていて、史前時代からはじまり太平天国時代に及んでいる。いままでも全く未踏の世界であつた江南の史前時代土器はその形態の自由さと斬新さにおいて目を驚かした。さきに北京の歴史博物館の陳列品で注目された山東省の史前土器と合わせ考えるとき、今後の中国史前考古学の世界は、大きな研究分野となるであ



南京西善橋南朝塋墓発見の塋刻画

ろう。殷代以降の閉塞的な美術様式にくらべて、格段にのびやかなフォルムの創造があったのである。さらに私にとって興味深かったのは近年発見された東晉末と推定される南朝塋室墓の塋刻画「竹

林七賢図」拓本である。幸いにこの壁画拓本の撮影が許可されたので、将来、その成果は公表したいと思っている。東晉の名画家顧愷之の時代に近いこの作品が発見されたことは、南朝絵画のかがやかしい伝統を考える一つの手掛かりをあたえられたことになる。

南京博物院では中国画の特別鑑賞の機会があたえられた。明清画の注目すべき作品がいくつか示されたが、特に徐渭の長卷雜花園には水墨の精髓がみられた。

南京博物院にくらべて上海博物館は、大いに趣を異にする。上海博物館はもと或る外国銀行であった大建築を利用している。この取藏品は民間に散在している文物を解放後に蒐集したものであり、その点、諸地博物館が新発掘品を主として陳列しているのと相違している。列品は美術品にかざられ、歴史的配列法によって並べられている。特に殷周銅器の蒐集が際立っている。さらに中国画の蒐集も南京博物院に匹敵するものであり、一九五九年その所蔵画の図録が出版された。この図録はまだ日本に輸入されていなく、私たちは同博物館でみせてもらったが、その原色版印刷の優秀さはちよっと日本にも類がない。東ドイツのライプツヒヒでの展覧会において文物複製にあたえられた金牌を獲得したということであった。

帰路の最後に、広州を訪れたとき、同市内の二つの博物館、すなわち広州博物館と広東省博物館をみた。上記の北京、西安、南京、



上海の大博物館に比べると、これはまだ収蔵が途上にあるという感じである。広州及び広東省という土地柄が遺物発掘、発見にも特別な性格をあたえているともいえる。

四川省の成都、湖南省の長沙の博物館はなんとかして訪れたいと思ったが、日数の制限から、ついに見学できなかった。

## 六

この旅行では、個々の作品を調査する暇はなかったが、だいたいの様子がよく分った。戦前にくらべて、著しいのはまず史前時代の遺物である。史前学は今後もっとも重要かつ豊富となるとおもわれる。中国原始美術の研究は大きな魅力となるだろう。それは中国大陸各地の特色をはっきりさせるとおもふ。そして殷周より隋唐に至る考古学と古代美術史は飛躍的にすすむと信じられる。特に四川省の文物、特にその漢代の彫刻、土偶のリアリズムの傾向は看過できない。大きな問題である。北朝美術については敦煌石窟以外になお甘肅省奥地に未知の石窟の発見可能性が藏されている。一方、碑像の発見は停滞している。金銅仏の発見可能性もすくないようである。これに対し、南北朝から隋唐にかけての墳墓墓室の壁画が陸続と発見され、今後もその発見はふえらるとおもわれる。従来、停滞した六朝隋唐絵画の研究は今後が楽しみになってきた。敦煌のような僻地

ではなく、中原地方の壁画が発見されつつあるからである。特に唐の永泰公主墓の発掘は劃期的だといえる。唐代については西安地方の発掘がおびただしい土偶と三彩陶器をもたらしている。それは古越磁のいちじるしい発見とともに、瞠目すべき成果である。従来、未詳であった編年の問題もあきらかとなるはずである。

近世についていえば、北京北郊の明の万曆帝陵すなわち定陵の発掘はいちじるしい。現地に建設された定陵博物館には、わが正倉院藏品を連想させるような、豪華な明代工芸の粋がかがやいている。特に数個の宝冠は注目される。

民間にかけて散在していた宋元明清の小彫像類を、私は北京の故宮博物院や上海博物館でみた。それらは木彫、釉磁などであったが、つよく鋭い写実がしめされていて、従来、知られなかった彫刻界を明かにしてくれた。この造形の伝統は十九世紀の天津在住の名工いわゆる「泥人帳」にまでつづいていると思う。

こうして拾い書きしてみても、中国の文化遺産の保護工作はすこぶる大きい成果となっていることが分る。忙しい鑑賞の旅行であったが、私は中国の美術史は大いに書きかえられる日が来つつあることを信じないわけにはゆかなかった。

（京都大学教授）